

PRAEVIDENTIA DAILY (12月17日)

昨日までの世界：ユーロ圏で景況感の内部分裂が拡大

昨日の主要通貨は結果的に先週末対比で小動きとなった。ドル/円は、先週金曜の反落地合いを引き継ぎ東京時間に一時102.65円へ続落したが、下値では押し目買いが持ち込まれ、なんとか103円台を回復して引けている。この間、米経済指標はまちまちの結果でドルへの影響は殆どみられなかった。NY 連銀製造業景況指数は1.0と前月の-2.2からは改善したものの市場予想(5.0)を下回った一方、鉱工業生産は前月比+1.1%と市場予想を上回る強い伸びとなり、設備稼働率も79.0%へ上昇が続いた。FOMCを控えて積極的なポジション造成が手控えられている状況とみられる。

ユーロは、ユーロ圏12月総合PMIが52.1と前月および市場予想を上回ったこと、およびユーロ圏10月貿易収支(季節調整前)が+172億ユーロと市場予想(+150億ユーロ)より大幅な黒字となったことを受けて上昇、一時1.3799ドルへ上昇し年初来高値(10月25日の1.3832ドル)に迫ったが、その後はFOMCを控えたドル押し目買いの動きからか1.37ドル台半ばへ反落している。ポンド/ドルもほぼ同様の動きとなった。なお、ユーロ圏PMIでは改善はほぼドイツ製造業主導で、フランス分は製造業47.1、サービス業47.4と前月および市場予想を下回る悪化が継続、またユーロ圏分でもサービス業は51.0と前月の51.2および市場予想の51.5を下回っており、独/仏、および製造業/サービス業の乖離が拡大しつつある。

豪ドルは、中国12月HSBC製造業PMI速報値が50.5と前月および市場予想を若干下回ったことから、一時0.8920ドルへ下落したが、先週金曜の安値(0.8910ドル)には至らず、その後は0.89ドル台半ばで横ばい/揉み合いの展開となっている。

主要通貨ペアの前営業日比変化率と、連動性が高い金利・株価・商品市況の変化

	変化率	米2年金利差	米2年金利	日2年金利	米10年金利差	米10年金利	日10年金利	米株価	日株価	原油WTI	原油Brent
ドル/円	-0.2	+0.01	+0.01	-0.00	+0.02	+0.01	-0.01	+0.6	-1.6	+0.7	+0.8
	変化率	独米2年金利差	独2年金利	米2年金利	独米10年金利差	独10年金利	米10年金利	欧株価	米株価	原油Brent	西伊の対独格差
ユーロ/ドル	+0.2	+0.00	+0.01	+0.01	-0.01	+0.01	+0.01	+1.6	+0.6	+0.8	-0.05
	変化率	英米2年金利差	英2年金利	米2年金利	英米10年金利差	英10年金利	米10年金利	英株価	米株価		
ポンド/ドル	+0.0	-0.01	-0.01	+0.01	-0.03	-0.01	+0.01	+1.3	+0.6		
	変化率	豪米2年金利差	豪2年金利	米2年金利	豪米10年金利差	豪10年金利	米10年金利	米株価	中国株価	CRB	
豪ドル/米ドル	-0.2	-0.05	-0.04	+0.01	-0.11	-0.10	+0.01	+0.6	-1.6	+0.3	
	変化率	NZ米2年金利差	NZ2年金利	米2年金利	NZ米10年金利差	NZ10年金利	米10年金利	米株価	中国株価	CRB	
NZドル/米ドル	-0.0	+0.01	+0.02	+0.01	-0.03	-0.02	+0.01	+0.6	-1.6	+0.3	
	変化率	米加2年金利差	米2年金利	加2年金利	米加10年金利差	米10年金利	加10年金利	米株価	原油WTI	CRB	
米ドル/加ドル	+0.1	-0.00	+0.01	+0.01	-0.00	+0.01	+0.01	+0.6	+0.7	+0.3	

(注)為替相場、株価および商品価格は前営業日比変化率、金利は前営業日比変化幅(%ポイント)。

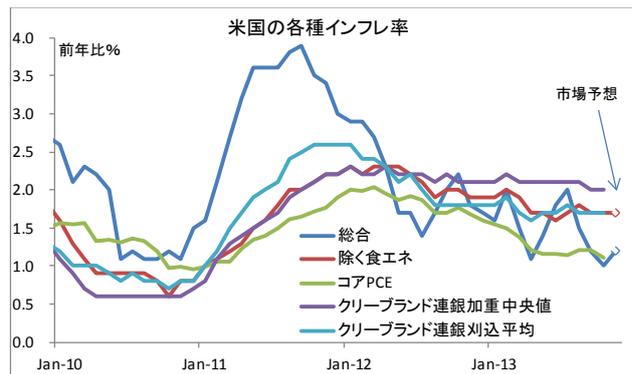
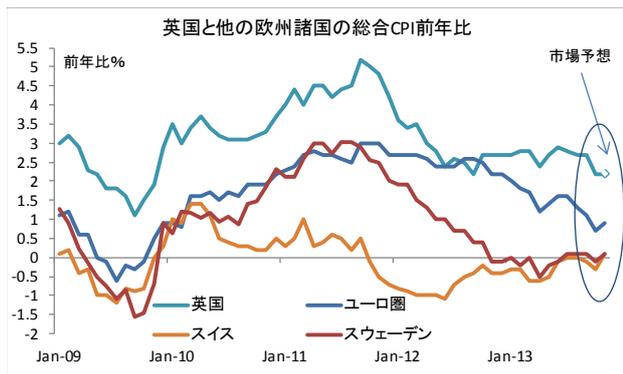
きょうの高慢な偏見：英国は大陸欧州に従うか

本日の相場材料としては、①豪RBA議事要旨(9:30)、②DeBelle豪RBA総裁補佐発言(時刻未定、金融市場担当)、③スウェーデン中銀金融政策決定(17:30、市場予想は政策金利を1.00%から0.75%へ25bps引下げ)、④英11月CPI前年比(18:30、前月、市場予想ともに+2.2%)、⑤独12月ZEW期待指数(19:00、前月54.6、市場予想55.0)、⑥米11月コアCPI前年比(22:30、前月、市場予想ともに+1.7%)、⑦米12月NAHB住宅市場指数(0:00、前月54、市場予想55)、⑧Carney・BoE総裁発言(0:30)、⑨Stevens・RBA総裁議会証言(翌7:30)、などが予定されている。

最も為替相場を動かしそうな材料は英総合CPIで、前月10月に欧州全体で前年比インフレ率が急低下しデフレ懸念が一時市場を支配するテーマとなったが、11月分は既に発表されたユーロ圏、スイスおよびスウェーデンなど他の欧州諸国でいずれも持ち直している中、英国分は前回と同じ+2.2%予想となっている(下図を参照)。

上下動の連動性が強い他の欧州諸国と同様に英国分も前月よりも伸び率が高まるようだと、ポンドは再び上昇し易いだろう。引き続き、FOMC 前ということで市場参加者はドルクロスポジションを傾げにくいとみられることから、ポンド買いの場合は対円がいいだろう。なお、米国でもコア CPI が発表されるが、Fed はインフレ指標につき CPI 統計よりもコア PCE デフレーターをより重視しており、かつ連動性があまり高くないため、余程大きく市場予想から乖離しない限り、市場の反応は限定的だろう（下図を参照）。ドル/円は FOMC 会合までは 103 円前後で方向感が出にくい展開が続こう。

豪州では金融市場担当の DeBelle 総裁補佐と Stevens 総裁の発言が予定されており、豪ドル安誘導が繰り返されるとみられ、発言のヘッドラインを受けたイニシャルリアクションとしてはパブロフの犬的な条件反射の豪ドル売りだろう。もっとも、豪ドル安を実現する手段として利下げや豪ドル売り為替介入を実施する可能性が低い中で口先介入が「から脅し」にならないよう効果を高めていくのは次第に困難になってくるはずで、特に先週木曜に Stevens 総裁が禁句ともいえる具体的水準への言及（対米ドルで 0.85 ドルが妥当）までしている状況では尚更だ。



ディスクレイマー

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、全てお客様ご自身でご判断下さいませようよろしくお願い申し上げます。
 当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当社はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。
 当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記して下さい。当資料は購読者向けに送付されたものであり、購読者以外への転送を禁じます。

プレビデンティア・ストラテジー株式会社
 金融商品取引業者（投資助言・代理業）関東財務局長（金商）第 2733 号
 一般社団法人 日本投資顧問業協会 会員番号 012-02641